

大田植の分布と種類に関する検討（2）  
—著書・論文・雑誌記事に含まれる大田植の記述—

A Study on the Distribution and Variety of Otaue (2) :  
Descriptions of Otaue Contained within Books, Papers and Magazine Articles

高野 宏  
TAKANO, Hiroshi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第48号 2019年12月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.48 2019

## 大田植の分布と種類に関する検討 (2)

——著書・論文・雑誌記事に含まれる大田植の記述——

高野 宏\*

### I はじめに

中国地方の山間部には、大田植という田植の習俗が伝承されている。それは、歌大工（「サンバイ」や「サゲ」などと称する）と早乙女による田植歌の掛け合いとともに進行する賑やかな田植である。広島県北広島町壬生の「壬生の花田植」や同じく広島県庄原市東城町塩原の「大山供養田植」がその代表的なものであり、今日に保存・伝承され、公開されているものの多くには、参加者によるパレード形式の風流芸である「道行」や、着飾った牛による代掻きの競演が付随する。同行事には地域差もあり、安芸・石見地方ではそれを「囃田」「花田植」などと呼び、主に大地主が小作人などを集めて大規模に自家の手作り地を植えたものであったと一般的にいられている。それに対し、出雲・備後地方では「牛供養」「供養田植」などと呼ばれる、上記三場面に牛馬供養の儀式が加わったものが家畜商や獣医を中心に行われてきたとされている。

こうした中国地方の大田植は、日本文化を考究する上でのきわめて重要な手がかりとして、様々な分野から研究がなされてきた。第一に、日本民俗学においては、大田植は日本における古い時代の田植習俗を伝えるものとされ、「日本人」の生活史や精神性（田の神信仰等）を明らかにする手掛かりとされた（柳田 1929など）。第二に、芸能史研究においては、それが芸能として確立する以前の田楽の芸態を伝えるものとされ、しばしば『栄花物語』『御裳着』の巻に描かれた「田植興」の芸態に比定される（植木 1982など）。第三に、国文学においては、広島県山県郡大朝町の『田植草紙』（田植歌を書き留めた写本）が「(中世に成立し)農民が伝承した最高・最大の歌謡文芸」（真鍋 1972: 40、カッコ内は引用者）として重要視されるなか、現存する田植行事の大田植にも注目が集まり、各地の田植歌が収集・分析された。第四として、田植歌に対する音楽学的なアプローチもある。そこでは、田植歌の分類（詩形やリズムから「安芸系」「備後系」「小笠原流」などに分類）と各類型の地図上への投射、他地域の民俗音楽との比較研究が行われた（内田 1978など）。

このように大田植は多方面から学術的な関心を集めているが、どの地域でいかなる大田植が行われている（きた）のか、その分布と種類に関しては具体的かつ全体的な把握が十分になされていない。すなわち、行政（教育委員会等）による記録や調査報告書、研究者による個別的・散発的な報告（著書、研究論文、雑誌記事）、一般の書籍・雑誌、市町村史（誌）を中心とした「郷土資料」

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授

など、大田植に関する記述を含む出版物は膨大にあるが、それらの情報は統合・整理されることなく断片化されたままである。もちろん大田植の分布と種類を示した研究物はあるが、必ずしも実態のすべてを反映したものとはいえない。たとえば、日本放送協会編（1969）に掲載された「囃し田」<sup>1</sup>の採集地と地域分類図は特筆すべきものであるが、それでも限られた調査対象地に関するものであり、記載された情報も田植歌の音楽学的な分類のみであった。

以上の問題意識から、筆者は前稿（高野 2018a）において、主に中国地方5県の行政による記録・調査報告書の記述内容から、199の事例地域を具体的な記述内容とともに整理した。また、そのなかで、安芸地方や山口県の瀬戸内海沿岸部など、中国山地を離れた地域にも大田植が存在していたこと、安芸地方においても「供養田植」「牛供養」が1事例確認されること（大朝町宮迫・筏津）、田の中での大田植から陸上で行う「田楽」「田囃子」への移行が多数確認されること（22事例）を指摘した。本稿は、そうした取り組みの継続として、研究者による学術的な著書・論文・雑誌記事および一般の書籍・雑誌に含まれる大田植の記述を抽出・整理し、検討を加える。これにより、大田植に関する具体的かつ全体的な理解、同習俗に対する空間的な把握が進むと考えられる。

## II 記載内容の整理と検討

### （1）記載内容の整理

本稿の対象は、「郷土資料」（市町村史〔誌〕、「郷土史家」の著作や地域の写真集などの流通が限定的な出版物等）を除く、研究者による大田植に関係する著作物、大田植の記述を含む一般の書籍・雑誌である。収集方法としては、CiNiiおよび国立国会図書館オンラインの検索機能を用い、「大田植」「囃し田」「囃し田」「囃子田」「花田植」「牛供養」「供養田植」をタイトルや目次を含む著作物をリストアップした。さらに、それらの著作物で引用されているものを加えて、最終的に108の関連文献を得ることができた。なお、前稿で網羅的な研究物として対象とした牛尾三千夫『大田植の習俗と田植歌』（1986）については、本稿での対象に含めていない。ただし、牛尾による大田植に関する著作物で、これに含まれないものについては収集し、整理の対象とした。

このようにして得た108の関連文献における大田植の記載内容を、事例地域ごとに整理したものが表である。結果として、432の記述、181の事例地域を抽出することができた。県ごとに両者の数を挙げるならば、鳥取県（記述7、事例地域7）、島根県（同132、72）、岡山県（同13、10）、広島県（同261、77）、山口県（同11、9）、その他の県（同8、6）となる。

なお、一覧表作成上の特記事項として、次の点を挙げておきたい。

・「中国山中」など、具体的な地域が明示されていないものについては非掲載とした。

<sup>1</sup> 「太鼓その他の囃し物を入れて指導者のサゲと早乙女が田植歌を唱和する『祭りをかねた特殊な田植行事』と定義されている（日本放送協会編 1969：9）。

表 所在地ごとにみた大田植の記述

	地域	形式	地域での名称	大田植の記述 (儀式の内容, 開催状況, 由来など)	出典
鳥取県	日野郡多里村	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	日野郡多里村多里・新屋	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	日野郡日南町細谷	—		出雲備後系の大田植	友久(1972)
	日野郡日南町(旧日野上村)	仕事田		山形家の3町5反歩の田植は, サゲ2人, シロカキ2人, カジロ2人, 苗サバキ3人, 早乙女20人の構成を3組作って行われる	牛尾・友久(1969)
	日野郡日野上村宮内	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	日野郡日野上村霞	牛供養		代播きが一番手になるためには来10俵を出すのが通例	牛尾(1969)
	日野郡阿良見緑村	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	鹿足郡津和野町畑カ迫	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)
	鹿足郡津和野町畑カ迫	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)
	鹿足郡蔵木村初見新田	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
鹿足郡蔵木村初見新田	—		安芸石見系の田植本	友久(1972)	
益田市梅月	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)	
益田市梅月	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)	
益田市上種	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)	
益田市上種	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)	
益田市下種	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)	
益田市下種	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)	
益田市赤雁	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)	
益田市赤雁	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)	
益田市大草	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)	
益田市大草	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)	
益田市鎌手	—		安芸系・小笠原流以外の田植本(主に備後系)	山路(1966)	
美濃郡美都町久原	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)	
美濃郡美都町久原	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)	
島	美濃郡匹見町	囃田	花田植え	以前は大地主などが独力でやっていて, 今日では4-5人が中心となり, 部落全体の者が協力して行っている 見物に適した田を選び, その所有者が田主(主催者)を務める 総指揮者は田主の有縁の者か, 部落内の有力者に頼むのが慣例	矢富(1966)
	美濃郡匹見上村広見・榎村	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	美濃郡匹見町下道川	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	美濃郡匹見町内容	牛供養	花田植え	新田を開拓する際に牛供養の意味で年に1-2回行われた 1955年に増田農協の理事寺戸氏が益田妙義寺前の水田で, 1960年に猪ノ木自治会長吉岡氏が猪ノ木谷にて行い, それを最後に断絶	矢富(1966)
	美濃郡匹見町道川	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)
	美濃郡匹見町道川	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)
	美濃郡匹見町道川	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1977)
	美都町宇丸茂	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)
	美都町宇丸茂	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1965)
	美都町宇津川	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)
美都町宇津川	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)	
根	那賀郡三隅町黒沢	囃田		花田を提供する主催者を「田主」といい, 立人, 代播き, 囃子方, 早乙女が参加する 「サンバイ祭り」が行われる直前に「牛立」という代播を掻いて, 牛を花田の四隅に内向きに立たせる	牛尾(1969)
	那賀郡三隅町黒沢	囃田		(写真のみ)	本田(1996)
	那賀郡三隅町黒沢	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)
	那賀郡三隅町黒沢	囃田		かつては田の神の神座であったと思われる立桶を立てる	萩原(1969)
	那賀郡三隅町黒沢	囃田		(写真のみ)	石塚(1975)
	那賀郡三隅町黒沢	囃田		(サンバイ棚の紹介)	矢富(1966)
	那賀郡三隅町黒沢	—		安芸系・小笠原流以外の田植本(主に備後系)	山路(1966)
	那賀郡三隅町黒沢	囃田	大代	祭礼的な大代では, 囃子方・早乙女は定刻前に花田に集合して, そこで叩き始めをしてから道行をする(楽器等の構成は, 大太鼓, 小太鼓, 鉦, 拍子木, ささら, 笛, 梵天)	内田(1966)
	那賀郡三隅町黒沢	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)
	那賀郡三隅町黒沢	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)
県	那賀郡三隅町井野大谷・上今明	囃田/田楽	三隅の田ばやし	青年団によって伝承されてきたが, 第二次世界大戦後に中断 1975年頃2集落が各々保存会結成 1982年の団体を契機に両保存会が合併し「三隅の田ばやし保存会」に水田で行われていたが, 同保存会結成以後祭祀芸能として神社で上演	本田・中野(1988, 1989)
	那賀郡三隅町井野	囃田			牛尾(1955)
	那賀郡三隅町井野	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)
	那賀郡三隅町井野	—		安芸系・小笠原流以外の田植本(主に備後系)	山路(1966)
	那賀郡三隅町井野	—		西石見型の田植本	友久(1972)
	那賀郡弥栄村	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)
	那賀郡弥栄村	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)
	那賀郡弥栄村長安本郷	囃田	長安本郷の大代	「サンバイ棚」「田主の棚」という二つの棚が作られる 三隅町黒沢と同じく「牛立」を行う	牛尾(1969)
	那賀郡弥栄村木都賀	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)
	那賀郡木東	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)
那賀郡弥栄村安城	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)	
那賀郡弥栄村安城	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)	
那賀郡金城村追原	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)	
那賀郡金城村追原	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)	
那賀郡金城村下来原	田楽	田囃子/丘囃子	代みての行事, 夏祭, あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)	
那賀郡金城村下来原	田楽	丘囃子/庭つつみ	牛が出ず, 早乙女も代表者2名のみで, 大太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)	

表 所在地ごとにみた大田植の記述(つづき)

	地域	形式	地域での名称	大田植の記述(儀式の内容、開催状況、由来など)	出典
	那賀郡金城村七条	囃田		三浦家の大田植にはハシマ出の儀礼がある	牛尾(1972)
	那賀郡金城町波佐	—		安芸石見系の田植本	友久(1972)
	那賀郡旭町今市	田楽	田囃子/丘囃子	代みでの行事、夏祭、あるいは何らかの特別な催し物の日に行われる	牛尾(1962)
	"	田楽	丘囃子/麻つづみ	牛が出ず、早乙女も代表者2名のみで、太太鼓等の囃子だけが参加	矢富(1966)
	"	—		安芸系・小笠原流以外の田植本(主に備後系)	山路(1966)
	邑智郡日貫村青笹(石見町青笹)	囃田/仕事田		田植組にて労働力を交換して大田植をする その中の上大江子という旧家の田植では、田主に代わってサゲが指揮 をとり、小太鼓、笛吹きなど7人の立人、早乙女40.45人が参加する	牛尾(1955)
	"	囃子田/仕事田/田楽		日常の「仕事田」と「大田植」「宮座」などの祭礼的な田植・田楽とでは 音楽や儀式の構成が異なる 前者では、胴頭による小太鼓を打ち、小太鼓2人、鉦1人が加わる程度 で、後者では胴頭がスリザサラを叩き、田鼓、小太鼓、鉦、笛が囃す(さら に道行や神降しの儀式が加わる)	内田(1963)
	"	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)
	"	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)
	"	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	"	—		安芸石見系の田植本	友久(1972)
島	邑智郡石見町日和村	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	邑智郡川本町	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)
	邑智郡川本町三原	—		小笠原流の田植本	山路(1966)
	"	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)
	邑智郡川本町因原	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	邑智郡川本町三谷	囃田/仕事田		木村家の大田植えの労働力構成を記載 サゲ3人、ササラ1人、代掻き12人、早乙女30人など	矢富(1966)
	"	—		安芸系の田植本、小笠原流の田植本	山路(1966)
	"	囃田		中国地方で最もリズムカルで古雅な美しいもの 地主の家の田植で田植歌を歌う者たちは、普段カンナ掘りを主業とし 方々を歩き回っていたり、たたら灰燻きをしていた人々(非農家)	宮本(1984[1956])
	"	囃田/仕事田	大田植え	上田家の大田植えの労働力構成を記載 胴頭1人、鼓・小太鼓若手人、拍子木1人、代掻き14人、早乙女35人等	矢富(1966)
	"	囃田/仕事田		有力な家である熊谷・木村家では、田植組とは別に自家の田植の日を 決め、サゲの入った歌謡田植を行っていた	田中・牛尾(1971)
	"	—		小笠原流の田植本	友久(1972)
	邑智郡石見町矢上	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	"	囃田		代掻き牛には花田敷の代わりにサバを一匹ずつ背負わせる	酒井(1958)
	"	—		安芸石見系の田植本	友久(1972)
	"	囃田	囃子田	江戸時代(170-180年前、1979年当時)に三谷村の利工門・利親親子 が囃子田を見学、「牛しぼり」の代を譲りて名声を博した	牛尾(1979)
根	邑智郡石見町矢上村後原	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	邑智郡石見町中野	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	"	—		安芸石見系の田植本	友久(1972)
	邑智郡石見町中野村森実	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	邑智郡石見町中野村茅場	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	邑智郡羽須美村阿須那	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	邑智郡矢上村鹿子原	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	邑智郡布施村	—		安芸系・小笠原流以外の田植本(主に備後系)	山路(1966)
	邑智郡桜江町	—		小笠原流の田植本	友久(1972)
	邑智郡桜江町長戸路	—		小笠原流の田植本	友久(1972)
邑智郡桜江町谷住郷	—		小笠原流の田植本	山路(1966)	
邑智郡桜江町長谷村井沢	—		安芸系・小笠原流以外の田植本(主に備後系)	山路(1966)	
県	大田市大代町	田楽	田囃子	田植の田楽団だけでなく長刀使いや杖使いがいて、もう田の中で行わ なくなり、完全に神事芸能化している	芳賀(1962)*
	"	仕事田/田楽		仕事田での田植歌よりも、宮座における「田植ぼやし」が明らかに主流 (田植歌の採譜)	内田(1965)
	"	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)
	"	囃田/田楽	大田植/陸ぼやし	部落で大田植を行うとなると、役員が集まり企画を立てる 山田・本郷・飯谷・久具の部落で田植組を作り、そこから牛と田楽団を 提供 大田植の費用は各戸からの寄付金をあてる 大田植の芸を夏祭でも奉納する、それを「陸ぼやし」という (サゲの選出・継承についても記載)	内田(1978)
	"	田楽	田植囃子	田を離れて地上で演じられる 所作が労働を離れて完全な演技となっている	横田(1985)
	"	—		囃し田形式の田植歌が残存	横田(1987b)
	"	田楽	田植囃子	田植時の豊年を祈る行事であるが、陸上で踊られる	本田(1996)
	大田市大森町大代	—		安芸系の田植本	山路(1966)
	大田市大森町飯谷	—		小笠原流の田植本	山路(1966)
	大田市大森町白环	—		小笠原流の田植本	山路(1966)
飯石郡来島村奥小田	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)	
飯石郡赤木町	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)	
飯石郡赤名	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)	
飯石郡赤来町赤石	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)	
飯石郡頓原町花栗	囃田		森山家(屋号梅蔵)には棚田のなかに一町の間積がある一枚田(父子 三代にして田普請して作り上げたもの、「梅蔵の一町積」)があり、年ご との大田植では70~80頭の牛が繰り出された 近在の人々は年中行事のごとくそれを見に来た 同じ部落の人たちは、当日一切の食事を森山家からの賄いで済ませた	牛尾(1969)	
飯石郡頓原町角井	—		出雲備後系の田植本	友久(1972)	
飯石郡吉田村民谷	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)	
飯石郡吉田村木下	—		安芸系・小笠原流以外の田植本(主に備後系)	山路(1966)	

表 所在地ごとにみた大田植の記述 (つづき)

	地域	形式	地域での名称	大田植の記述 (儀式の内容, 開催状況, 由来など)	出典	
島	飯石郡植原村花栗			安芸系・小笠原流以外の田植本(主に備後系)	山路(1966)	
	飯石郡	牛供養	牛供養	『飯石録』の記述から, 牛供養は景行天皇のころより存在し, 獣医が引退するときに行うものであったことが分かる	伊藤(1921)	
	飯石郡内16村	牛供養	牛供養	「去年は隣村でやったけに今年は俺が村で」といった具合で, 村長が地域住民と相談して開催を決める(4月末, 開催時期は「5月田植の季節」) 開催の決定後, 郡内の全域から「田植女」や牛を集める 午前中に牛供養の儀式, 昼食の振舞いを挟んで, 午後2時頃から牛の遊行, 代掻き, 田植作業の順で進行 ('不思議な供養', '異風奇風」と表現)	遠藤(1930)*	
	"	牛供養	牛供養	言い伝えでは「千七八百年も前からある行事」で, 他地方に出ている者も必ず帰村して村民と一緒に楽しむ 元来伯楽の主催によるが, 近年は農家, とりわけ村長の発起により開催開催が発起されると, 隣村の組組に米麦その他の穀物や雑品の寄贈をお願いするとともに, 「牡牛何頭に植女何人御引き申しまつる」と伝える開催の報は郡内に広まり, 当日は夥しい人出て, 屋台なども出る 代掻き牛の順番については主催者への贈り物の多さによって決められるため, 寄贈の物品は大量となる 午前中に牛供養の儀式が行われた後, 寄贈された物品からの昼食の振舞いがあり, 代掻き, 田植作業と進行	風俗研究会(1917)	
根	"	牛供養	牛供養	『飯石録』に牛医が引退時に必ず行くと記載, 元来伯楽が開催したものの伯楽は庄屋・組組に相談して開催を決め, 自分の村を中心として近隣の村々に米や穀物, 雑品の寄贈を願い, 各村へ牡牛何頭, 早乙女何人と決めて招待する 当日は伯楽が各村に雇い人を派遣して物品を運搬する 牛供養の儀式は, 農の庭に祭壇を作って神仏混淆にて行う 代掻き牛の順番は, 主催者への贈り物の多さによって決定	及川(1934)	
	多伎町		囃田	花田植え	中国地方で広く行われていたものが地域特有のものに変化 豪農などが早乙女たちを慰労する行事として開催	尊鉢(2017)
	簸川郡佐田村	田楽	田囃し		出雲大社の奉納神事として行う 同地の田囃しを含む大田植が最も古形で, 徐々に広島方面に伝播	宝塚歌劇団(1959a, b)*
	"	牛供養	牛供養		「牛供養の田うへうたの次第」と題された田植歌の歌本が残されている	田中(1987)
	簸川郡山口村	仕事田			田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	簸川郡山口村山口	仕事田			田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	簸川郡窪田村橋波	仕事田			田植組による労働としての大田植	石塚(1978)
	仁多郡三成村	囃田			山県郡大朝町新庄と同様の習俗が存在	岩橋(1928b)
	"	囃田			大田植の当日, 昼食後の休憩が長いので, 青年たちは勝手元の籠からそとと鑄墨を手付けてきて, 縁側で休んでいる娘らの顔に塗りつけて逃がたりする	及川(1934)
	仁多郡馬木村	仕事田			田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
仁多郡馬木村大馬木・大峠	仕事田			田植組による労働としての大田植	石塚(1950)	
県	仁多郡亀高村	仕事田			田植組による労働としての大田植	石塚(1981)
	能義郡広瀬町比田地区	囃田	大のう		地区内で田植組を作り, 雇人をして勢揃いし, 夜明けに田植の当主の家から行列をしてつくり田に行く(サケ, 早乙女, 楽団, 花牛の行列) 早乙女は着飾るも下着を付けない	内田(1978)
	"	牛供養	牛供養		文化年間より牛供養が伝わる 家畜商や獣医が身銭を切って行うものであったが, 1946年, 島根県農会と比田村農会の共催によるものを最後に断絶 1992年に46年ぶりに復活	佐々木(1994)*
	"	牛供養	牛供養		家畜商の安部田氏が明治初年に備後地方北部から牛供養の儀式を習得, 1875・1879年に開催 その後, 家畜商に牛供養を行う風が浸透, 1902年と1906年に開催例 大正期に牛供養が衰退した後, 牛供養の踊りが風流化	高野(2018b)
岡	阿哲郡神郷町	田楽	頭打ち		高野(2018b)	
	阿哲郡西町	仕事田	太鼓田		広島県安芸地方の囃田と比べて素朴かつ原始的 仕事田を太鼓打ち, 田植歌を歌いながら行うのが一般的で, 全戸残らずそれが行われていた(終植への移行で1956年頃から衰退)	神野(1984)* 難波(1966)
	"	?			広島県安芸地方の囃田と比べて素朴かつ原始的	神野(1984)
	阿哲郡神代村	仕事田			田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	阿哲郡多町				(田植歌の採譜)	内田(1978)
	"	?			広島県安芸地方の囃田と比べて素朴かつ原始的	神野(1984)*
	阿哲郡多町田端				出雲備後系の田植本	友久(1972)
	阿哲町紋屋				出雲備後系の田植本	友久(1972)
	川上郡備中町				出雲備後系の田植本	友久(1972)
	川上郡湯野村	囃田			山県郡大朝町新庄と同様の習俗が存在	岩橋(1928b)
山	"	牛供養?			大田植の主催者は8畝から1反以上の田畑を持つ者が当番で担当 通常の田植が済む頃を見計らい日時を通知しておく, 当日家畜商が牛(大山と染め抜いた赤または紫の旗を鞭にさす)を引いて方々から集合 早乙女(30・40人)には晒手拭いを配る 当日は, 神官の祈祷(田植をする田の傍らに高座を設け, 神官が上って祝詞を唱え, 豊穡を祈願), 牛および参加者の遊行(家畜商が追分節を歌う), 代掻き, 田植作業の順に進み, 5時間程度で終了 その後, 当番の家に集まって, 酒食のもてなしを受けて解散	及川(1934)
	真庭郡川上村				田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	岡山市伊福町2丁目				出雲備後系の田植本	友久(1972)
広島県	山県郡千代田町	囃田			出雲備後系の田植本	芳賀(1959)*
	"	囃田	大田植		農地解放で元の地主がいなくなったので, 地元の人が昔から大田植をやっていた田を借りて, 村の田植の最後の日に行っている	今野(1964)

表 所在地ごとにみた大田植の記述(つづき)

地域	形式	地域での名称	大田植の記述(儀式の内容、開催状況、由来など)	出典		
山	山梨郡千代田町	囃田	花田植 (飾り牛の写真のみ)	新藤(1964)		
	"	囃田	田囃子/大花田 5-10軒の田植組で、労働として行う歌謡田植を「田囃子」という対して、大地主が自分の支配下にある農民や小作人を集めて大掛かりに行うものを「大花田」という。これらが廃れたのを惜しみ、1930年頃から田楽団が組織	高柳(1973)*		
	"	囃田	大田植 田植のあった夜に「さなぶり」として宴会を行う	芳賀(1965)*		
	"	囃田	花田植 (写真のみ)	本田(1996)		
	"	囃田	花田植	芳賀(1997b)*		
	山	山梨郡千代田町千生	囃田	花田植	新藤(1956)	
		"	囃田	千生の花田植	酒井(1958)	
		"	囃田		(演目「花田植」のための取材について)	宝塚歌劇団(1959a, b)*
		"	囃田		戦前は大地主の田やお宮の田の田植で行った	芳賀(1962a)*
		"	囃田	千生の大田植	江戸時代には、白米、伊閑、米屋の3軒の村総代が大田植を行っていたが、明治期にいずれも没落。大正中期からすでに観光化された大田植が実施されている	芳賀(1962b)*
		"	囃田	千生の大田植	(写真のみ)	岡本(1963)*
		"	囃田	千生の花田植		新藤(1964)
		"	囃田	千生の花田植		山と溪谷社(1967)
		"	囃田	千生の花田植		久枝(1969)
		"	囃田	千生の花田植		芳賀(1969)*
		"	囃田	千生の花田植		牛尾(1969)
		"	—	—	安芸石見系の田植本	友久(1972)
		"	囃田	千生の花田植	庄屋、大地主が権威を誇示するデモンストレーションであったが、大正初期には大地主が没落し、封建制の瓦解によって次第に衰退。現在は千代田町商工会と千生の花田植保存会が観光事業として主催(1974年間催時の見聞記録)	麻生(1973)*
		"	囃田	大花田植		入江(1974)*
		"	囃田	千生の花田植	岡村家の文書には1894年以降花田植の記録がない。岡村家の花田植が中止されたのを受け、当時の若衆たちが相図ってそれを継続。さらに千生商店街の人たちが大々的に継続実施するに至る。昭和30年代までは地元だけでなく、山梨郡全域、高田郡美土里町、遠くは安佐郡伴方面からも牛が集まった。早乙女や囃子方も200人を超え、早乙女は群の前に二列で田植をした(田植歌の採譜)	新藤(1976)
"		囃田	千生の花田植		内田(1978)	
"		囃田	千生の花田植		内田(1988)	
"		囃田	千生の花田植		野本(1990)	
"		囃田	千生の花田植		齋藤(1991)*	
"		囃田	千生の花田植		山中(1991)	
高	"	囃田	千生のはやし田 千生の花田植 当地のはやし田には10軒ぐらいの組でおこなう小規模な「組植え」と、大地主の手作り地で行う大規模なものと二つあった。後者は、岡村家、伊閑家、綿問屋の和泉屋、組屋のさな屋などが行ったとくに岡村家は持田が多く、自宅前の「三反大明」で行うものは当地方最大のはやし田として有名であった。岡村家のはやし田は明治の中頃に中止され、それを森下家が継いだ。これも昭和になって行われなくなった。その後、千生の商工会が古老や先輩に取材して復興。1976年に川東と千生のはやし田を合わせて「千生の花田植」とし、国の重要無形民俗文化財に指定	真下(1992)		
	"	囃田	はやし田 花田植 千生の花田植 田植組合内での小規模な予祝儀礼としての「はやし田」と、大地主のもとの大規模な予祝儀礼としての「花田植」とがある。近世末期から明治中期まで、大地主の花田植があったが廃れたので、千生商工会の行事として継続されている。神事はすでに失われている(1995年当時)	藤井(1995a)		
	"	囃田	千生の花田植		天野(1996)*	
	"	囃田/田楽	千生の花田植	大地主が人々を動員して自家の持田を植えるものが原型。明治中期以降の大地主の没落、県知事令「農十大必綱」で衰退。昭和初期、千生商工会の人々が古老らに取材をし復元、農楽団結成。農楽団は田楽競演大会に出場し、派手な演技や衣装を取り入れた。1975年に県の文化財指定を受け、翌年には「川東の囃し田」とともに国の重要無形民俗文化財に指定	橋本(1996)	
	"	囃田/田楽	千生の花田植	橋本(1996)と同内容	橋本(2014[1997])	
	"	囃田	千生の大田植	朝、田の神降しの儀式をする。田植時の昼食は朴の葉に包まれた握り飯で、田の中で食べる。田植が終わると、あざ道のあちこちで田の神を送る焚火をする	芳賀(1997a)*	
	"	囃田	千生の花田植		建設省広報協議会(1998)*	
	"	囃田	千生の花田植	(大学ゼミでの花田植体験記)	山崎(2000)*	
	"	囃田	千生の花田植		岡村(2000)*	
	"	囃田	千生の花田植		宇井(2002)*	
泉	"	囃田	千生の花田植	植木(2009)		
	"	囃田	千生の花田植	小沢(2012)*		
	"	囃田/田楽	千生の花田植	千生田楽団は囃田を披露するだけでなく、田楽競演大会に出場	松井(2012)	
	"	囃田	千生の花田植	(2013年間催時の取材記事)	石田(2013)*	
	"	囃田	千生の花田植	明治時代には千生地域の大地主が行う花田植が近郷で有名になっていたが、昭和になるころには一時衰退。その後、地域住民や商工会によって再興。1976年、川東・千生の花田植を合同して国の無形民俗文化財に指定。2011年、無形文化遺産に登録	松井(2013a)*	

表 所在地ごとにみた大田植の記述 (つづき)

	地域	形式	地域での名称	大田植の記述 (儀式の内容、開催状況、由来など)	出典
広	山県郡千代田町壬生	仕事田	山田植 郷田植	壬生村の神主・井上家の1854年の田植は「山田植」と「郷田植」とに分かれており、後者のみに「田囃子」1名が入っている	六郷(2014)
	"	囃田	壬生の花田植	花田植終了後、エブリを田の畔に逆さに立て、三把苗を載せる(田の神がエブリに留まって田を見守る、エブリを伝って天に帰ると伝承) 現在の伝承・公開体制を詳述	松井(2016)
	"	囃田	壬生の花田植	明治時代に大地主による花田植が衰退した理由:参加者に対する食事と酒の提供が義務付けられていたために経済的な負担が大きかった(労働としての非効率性が顕在化した)こと、日露戦争後の地方改良運動で田楽や歌が禁止されたこと 大正末期から「郷土舞踊と民謡の会」が東京で開催されて以降、田楽は「郷土芸術」に転換し、陸上の競技会場で披露されるようになった 戦後、商工会が中心となって花田植を復活させた	平沼(2016)
	"	囃田	壬生の花田植	機械化以前の稲作の形式を残しているが、短期苗代や綱植のように近代以降に生み出された農業技術も取り入れられている(その意味で、当地における農業慣行の歴史情報を保存伝承する装置)	川嶋(2018)
	山県郡千代田町川東	—	—	安芸石見系の田植本	友久(1972)
	"	囃田	川東のはやし田	もとは惣森村で行われていたもので、同地を治めていた惣森氏が農民となり、京都の猿楽や田楽を田植に応用したのが起源 惣森氏は文化年間に家運が傾き絶えるが、七反田や河内屋が惣森氏のはやし田を継承、1902年頃に両家が衰えるまで行っていた その後、県知事令「農十大必綱」の影響ではやし田が行われてこなかったが、昭和初期に川東田楽団によって復興 七反田や河内屋のはやし田では、午前4時頃に「起こし鼓」が鳴り、さんばいや早乙女、その日田に入る人たちが支度を整えて集合した 1959年、県の無形民俗文化財の指定を受ける	真下(1992)
	"	囃田/田楽	川東の囃し田	大地主が人々を動員して自家の持田を植えるものが原型 昭和初期に田楽団を結成、田楽競演大会に盛んに出場し、その過程で派手な演技や衣装を取り入れていった よく本来の存在形態を残していると考えられ、1959年に県指定を受ける	橋本(1996)
	"	囃田/田楽	川東の囃し田	橋本(1996)と同内容	橋本(2014[1997])
	"	囃田/田楽	—	1929年、壬生町田楽団(現・川東田楽団)発足 水田での囃田だけでなく、陸上や屋内での田楽を通年で披露	松井(2010)
	"	囃田	—	—	仲井(2013)
	"	囃田	はやし田	惣森家の田植を引き継いだ七反田のはやし田は、早朝より作業が始まり、参加者に朝食や昼食の食事が振舞われた 子どもにも振舞うため、一日に消費される米は12俵にもなった	六郷(2014)
	島	山県郡千代田町有田	囃田	—	安永年間における一乗寺立川家の囃田の記録が残る
"		囃田	—	—	芳賀(1977a,b)*
"		囃田	—	安永年間の一乗寺立川家の大田植は現在壬生や新庄で行われている花田植と同様のもので、山県東部一帯の割庄屋として君臨した大地主の大田植らしい盛大さがあった	新藤(1956)
"		囃田	—	安永年間の一乗寺立川家の『格式帳』等によると、同家の花田植に集まった牛は数十頭に及び、早乙女や囃子方も200人近くが参加、近郷からの夥しい数の見物人が集まった	新藤(1976)*
"		囃田	—	一乗寺立川家の1919年の『格式帳』より、当時より田鼓が「舞踊的な身体表現行っていた可能性がある	松井(2010)
"		囃田	—	一乗寺立川家の『格式帳』より、同家の安永年間の大花田植は相当に大規模であったことが分かる	新藤(1964)
"		囃田	—	一乗寺立川家の「田植え」は5月27日の夏至に行われ、この一円でもっとも大規模なものであった 近郷近在の田植が終わっているため、多数の夫婦が集まるが、どれだけ集まっても食事を提供できるだけの財力があつた (ただし、同家は1884年より経費の問題で大規模な田植を中止し、1908年に奥筋の者が再興するも2・3年で衰退)	六郷(2014)
山県郡千代田町八重		囃田	—	戦前は大地主の田やお宮の田の田植で行った	芳賀(1962)*
"		囃田	—	安永年間書写の『格式帳』より、当時の囃田でも、囃子方が白い房のある撥を巧みに回し「揺れ動く所作」をしていた	真鍋(1971)
"		囃田	—	安永年間書写の『格式帳』より、囃し手は早乙女より多く、巧みに白い房のある拍子木を回していたことが分かる	植木(2009)
県	山県郡千代田町入庭	囃田	—	(苗取りの写真のみ)	新藤(1964)
	山県郡千代田町南方	—	—	安芸石見系の田植本	友久(1972)
	"	—	—	高田郡型の田植本	友久(1972)
	"	仕事田	オータ	アサウエを「コータ」、各家で最大の田を植える大田植を「オータ」というオータでは、サンバイダケの演奏に合わせて田植歌が歌われた 作業にあたった人々には当時からムスピの食事が出た	六郷(2014)
	山県郡千代田町本地	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1978)
	"	囃田/仕事田	囃し田	「国郡志御用二付下調書出帳」に、手作りの田が多い者は割竹、鼓、太鼓、手打鉦を入れて大規模に歌謡田植を行う、少ない者は割竹くらいで囃す旨が記されている	藤井(1995a)
	山県郡千代田町石井谷	囃田	—	「国郡志御用二付下調書出帳」に、手作りの田が多い者が百姓を集めて、太鼓やささらで囃す田植をしている旨が記されている	藤井(1995a)
	山県郡大朝町新庄	囃田	囃し田	囃し田は午前4-5時に始まり、日暮れに終わる 早乙女たちは晴れの衣装に赤たすまで参加する (1928年「郷土舞踊大会」の見聞記事)	日本青年館(1928)*
	"	囃田/田楽	—	—	岩橋(1928b)
	"	囃田	囃し田	囃し田は午前4-5時に始まり、日暮れに終わる 田植歌は時間の経過とともに、時刻に合わせてものが歌われる	及川(1934)
"	囃田	新庄田囃子	—	新藤(1956)	
"	囃田	—	—	芳賀(1959)*	

表 所在地ごとにみた大田植の記述(つづき)

地域	形式	地域での名称	大田植の記述(儀式の内容、開催状況、由来など)	出典	
山県郡大朝町	新庄	囃田	花田植	(1961年開催時の見聞記録)	田中(1961)
	"	囃田	囃し田	戦前は大地主の田やお宮の田の田植で行った	芳賀(1962)*
	"	囃田	花田植	(写真のみ)	新藤(1964)
	"	囃田	囃し田		初代 <sup>レ</sup> の東京大会組織委員会(1964)*
	"	囃田			久枝(1969)
	"	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)
	"	—		安芸石見系の田植本	友久(1972)
	"	囃田	田囃子/大花田	5・10軒の田植組で、労働として行う歌謡田植を「田囃子」という対して、大地主が自分の支配下にある農民や小作人を集めて大掛かりに行うものを「大花田」という これらが廃れたのを惜しみ、1930年頃から田楽団を組織	高柳(1973)*
	"	囃田			芳賀(1977a,b)*
	"	囃田	花田植	(田植歌の採譜、花田植・すりざさら(さざら竹)の写真)	内田(1978)
	"	囃田			高橋(1979)*
	"	囃田/仕事田		田植組の田植でもサンバイと歌を掛け合うものはあったが、囃子も入る純然たる歌謡田植は地主によるもの 地主の歌謡田植はあらかじめ日を決めて行われていた	松尾(1981)
	"	囃田	新庄の囃田		横田(1985)
	"	囃田	新庄の囃田	(1986年開催時の見聞記録)	横田(1987a)
	"	囃田	新庄の囃田	囃し田形式の田植歌が残存	横田(1987b)
	"	囃田	新庄のはやし田		内田(1988)
	高田郡	"	囃田	田の神を迎える「さんばい降し」の儀式で始まる 途中で「腰」という中休みが入り、田の中で木の葉に包んだ握り飯を食べる 現在は1928年結成の保存会が伝承	本田・中野(1988) 本田・中野(1989)
		"	囃田	1981年から代掻き牛に馬鍬をつけなくなった(1989年段階) 田植が半分済むころにヒルマとなり、ホウキという木の葉に包まれた黒大豆入りのむすびを食べる	野本(1990)
"		囃田	新庄の囃子田		本田(1992)
"		囃田	新庄のはやし田	「国郡志下調帳」にさんばい祭りとはやし田の記載あり 1952年に国指定、制度が改まり1959年に改めて県指定を受ける	真下(1992)
"		囃田	囃し田		本田(1995)
"		囃田		牛に鍬を付けない(1995年時)、田植の前に田の神降しの儀式が存在 複数の代掻き本が残されている	藤井(1995a)
"		囃田	囃子田	現在は午後2時頃から始めているが、もとは早朝4-5時から始まり、日暮れに終わるものであった 1928年の「全国郷土舞踊と民謡の会」に出場	本田(1996)
"		囃田	新庄のはやし田	田植に先立って「サンバイ祭り」が行われる	岡村(2000)*
"		囃田		田植歌の形式は「八調子」 代掻き、田植作業に先立って「サンバイ祭り」の神事あり 高宮のもの合わせ、「安芸のはやし田」として国指定	倉田(2008)*
"		囃田/田楽		1910年と1915年に青年団による囃田が行われた 1928年には全国規模の青年団行事である「郷土舞踊と民謡の会」に出場し、舞台上で田楽を披露した	松井(2010)
"		囃田	新庄のはやし田		小沢(2012)*
"		囃田	新庄のはやし田		松井(2012)
"		囃田	囃し田		白南(2012)*
"		囃田	新庄のはやし田	冷涼な気候で高密度で苗を植えるため、調子の速い田植歌(「八調子」)が発達 現在は、高宮のものと一緒に「安芸のはやし田」として国指定を受け、「大花田植」の一環として開催	松井(2013b)*
"		囃田			仲井(2013)
"		囃田	はやし田	通常は馬鍬を付けずに代を掻く	石垣(2014)
"		囃田	新庄のはやし田	田植歌の曲調が他に比べて際立って速い (田植歌の採譜)	森(2014)
山県郡大朝町		枝の宮	—		内田(1978)
	岩戸	—	安芸石見系の田植本	友久(1972)	
	高田郡八千代町	土師	囃田	1920年頃には、大地主であった岡崎家の大田植が盛大に行われていた(2町1反5畝の大田植、総勢200人) 岡崎家の大田植における先牛は同家の飼牛がなる習わしだが、二番牛・三番牛になるためには午前4時には田に入っている必要があった	牛尾(1969)
		"	—	安芸石見系の田植本	友久(1972)
		"	囃田	大正時代、岡崎、石井、大徳、白崎、沖重、小屋といった地主の家で大田植が行われた 岡崎家の大田植(2町1反7畝)では、牛40頭、早乙女70-80人のほか、多数の囃し手が参加 労働力は下男・下女、小作人、賑やかしが好きな村人	藤井(1979)
		"	囃田	大正時代、岡崎、石井、大徳、白崎、沖重、小屋といった家で大田植が行われた 岡崎家の大田植(2町1反7畝)では、牛40頭、早乙女70-80人のほか、多数の囃し手が参加、総勢約190人 家の遠くから植え始め、門田を最後に残しておいた(門田での代掻き・田植が最も盛り上がった)	藤井(1991)
		"	囃田		藤井(1991)と同内容
		"	囃田		藤井(1995a)
		"	囃田		藤井(1995b)*
		"	囃田		藤井(1995b)*
高田郡吉田町	多治比	囃田	囃し田形式の田植歌が残存 (田植歌の採譜)	田川(1953) 内田(1978)	

表 所在地ごとにみた大田植の記述 (つづき)

地域	形式	地域での名称	大田植の記述 (儀式の内容、開催状況、由来など)	出典
広島	高田郡吉田町多治比		明和年間における丸屋の歌謡田植を「家業考」から紹介	松尾(1981)
	"	囃田	明和年間、吉川家(屋号は丸屋)が大規模な大田植を実施 牛16-20頭、早乙女25-30人をはじめ、総勢約80人が参加	藤井(1991)
	"	囃田	藤井(1995b)と同じく、明和年間丸屋における囃田の労働力構成を記載 当日の参加者は、田植組の人、合力人、日雇、丁稚かななり、田植組の 人には夕食を出さず、その他の人々には米で労賃の支払いをした	藤井(1995a)
	"	囃田	丸屋の明和年間における農家経営を記した「家業考」によると、同家は 1町3反の田植を牛16-20頭、早乙女25-30人をはじめ、総勢約80人 で行った	藤井(1995b)*
	"	囃田	明和年間の丸屋の囃田では家周りの1町3反の田を総勢80名で植え、 歌大工ほか5-6人の囃し手が囃した	植木(2009)
	"	囃田	明和年間、大地主の丸屋は家屋周辺の1町3反の田を最大81人 (2人役として計算した牛を入れると126人)で植えた(「家業考」より) 労働力は、奉公人などの自家労働力、近隣の横見組・竹筒組・谷出組 による「組合田植」、日雇でからなる	六郷(2014)
	山県郡北広島町志路原	囃田	原東大花田植	松井(2010)
	"	囃田	原東大花田植	松井(2011)
	"	囃田	原東大花田植	松井(2012)
	"	囃田	原東大花田植	森(2014)
山県郡安芸太田町殿賀	田楽	殿賀田楽	囃田をもとに芸能が陸上化したもの	松井(2012)
山県郡安芸太田町殿賀	田楽		1932年、可部町での第一回県下田楽競演大会に殿賀田楽団が出場 昭和初期に、殿賀田楽団を同地区中部の「中の調子」、南部の「六調 子」、双方に伝わる「八調子」を統合して結成	松井(2010)
山県郡北広島町阿坂	田楽	阿坂婦人田楽	1952年に民謡の先生に教わり、田楽の振り付けを改良	松井(2010)
"	田楽	阿坂婦人田楽	囃田をもとに芸能が陸上化したもの	松井(2012)
山県郡雄賀原村 (雄鹿原村)	囃田		1825年4月28日の囃田の様子を「若葉の雫」に掲載 行事内における性的表現で豊穡が祈願される 美しく飾りを施した代掻き牛が参加していた	真鍋(1971)
"	囃田		1825年4月28日の囃田の様子を「若葉の雫」に掲載 15-6頭の代掻き牛、40人もの早乙女、太鼓・笛・手拍子・ササラ・三線 の囃し手が参加	植木(2009)
"	囃田		歌い出しは老夫婦に扮して滑稽で性的な芸を行う	真鍋(1971)、植木(2009)と同じく、「若葉の雫」の記述を紹介
"	牛供養	牛供養	明治初年から1951年までの牛供養の会開催記録(「雄鹿原村史」)か ら、獣医が多く牛供養を開催してきた	六郷(2014)
山県郡八幡村	仕事田		獣医以外にも、分限者の年祝いや共有田の田植で牛供養が行われた 田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
"	仕事田		田植組による労働としての大田植、十軒位の寄合田では、歌大工1人、 小太鼓1名、早乙女15-16人、その他諸役十数人ほどで、1日1町歩 前後を植える	牛尾(1941)
山県郡八幡村八幡・樽床 (芸北町八幡・樽床)	囃田/仕事田	大植	昔村に医者かいて農業をしていたころ、村中から田を植えに行き、どぶ ろくを振舞われていた そのほかの家では近隣2~3軒で組を作って田植をするが、大して 囃しはせず、せいぜい太鼓を打つか鉦を打つくらい	宮本(1976[1940])
"	—	—	安芸石見系の田植本	友久(1972)
山県郡芸北町小原	—	—	安芸石見系の田植本	友久(1972)
山県郡八幡村八幡・樽床	囃田/牛供養	大代	大きな百姓が年祝いの喜びなどに開催した(今では村の田植が済んだ ころ、若者たちが田を借りて田植の祝いとしてする) 世の穏やかな年にすべきとされ、日中戦争がはじまって以降は中止 伯楽(牛医者)が自分の借金解消のため、牛供養として行うこともある 主催者は、村の世話を通して早乙女や牛を頼み、参加者全員に何ら かの心づけをしなければならない(早乙女には襷を1本ずつ配る) 早乙女は20-30人、多いときに50人も参加し(八幡原の場合)、牛も村 中から出るので20-30にはなる	宮本(1976[1940])
山県郡豊平町吉坂	—	—	安芸石見系の田植本	友久(1972)
山県郡美和村	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1980)
山県郡加計町	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1972)
"	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1978)
高田郡	—	—	(「国郡志下調べ帳」の記述)田植組による仕事としての大田植、大規模 な娯楽としての大田植の記述が共にある	友久(1979)
高田郡丹比村	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1972)
"	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1978)
高田郡美土里町本郷(本 村)	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1972)
"	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1978)
"	囃田	本郷のはやし田	「国郡志御用ニ付書出帳」に囃田の記載あり、1973年に県指定	真下(1992)
"	囃田		田の神を迎えて田植をする 構成・進行は壬生や新庄のものど大きな違いはない	藤井(1995a)
高田郡美土里町生桑	仕事田	生桑のはやし田	田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
"	囃田	生桑のはやし田	「国郡志御用ニ付書出帳」に囃田の記載あり、1973年に県指定	真下(1992)
"	囃田		田の神を迎えて田植をする 構成・進行は壬生や新庄のものど大きな違いはない	藤井(1995a)
高田郡生桑村地教寺	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
高田郡美土里町生田	—	—	安芸石見系の田植本	友久(1972)
"	囃田	生田のはやし田	「国郡志御用ニ付書出帳」に囃田の記載あり 村の主だった家ではいくつかの組が寄り集まって大規模に行っていた (早乙女・男衆各70-80人、牛も30-40頭くらい)、1973年に県指定	真下(1992)

表 所在地ごとにみた大田植の記述(つづき)

	地域	形式	地域での名称	大田植の記述(儀式の内容、開催状況、由来など)	出典	
広	高田郡美土里町生田	囃田		田の神を迎えて田植をする 構成・進行は壬生や新庄のものど大きな違いはない	藤井(1995a)	
	高田郡美土里町北	?		「北ぶし」の祭祥地であるが、現在(1995年)は消滅	藤井(1995a)	
	高田郡高宮町来原	—		(田植歌の採譜)	内田(1967)	
	高田郡高宮町来原	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)	
	高田郡高宮町川根	—		安芸石見系の田植本	友久(1972)	
	高田郡高宮町川根	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)	
	高田郡高宮町原田	囃田/仕事田	原田囃し田	赤名節を始め河内節、北節、ナンジャイ節、原田節、片オロシ、半カケ、大歌、ゆりうたなど、安芸系、備後系、石見系の様々な田植歌の唱法が現存していること、普段の田植でも田植歌を歌っていることが特徴	萩原(1969)	
	高田郡高宮町原田	囃田	囃子田	神事を行う神主、三把苗持ちの他、立人、囃子方、早乙女が参加	牛尾(1969)	
	高田郡高宮町原田	囃田		田の神降ろしの音曲は「赤名ぶし」で行われ、歌大工がサザをすり、囃子方が腰鼓を打つ	牛尾(1969)*	
	高田郡高宮町原田	囃田/仕事田		仕事田の田植でも田植歌を歌っている	牛尾(1979)	
	高田郡高宮町原田	囃田/仕事田	原田のはやし田	田中氏(さんばい)の努力で、仕事田、はやし田を問わず、すべての田植を囃し田形式で賑やかにしている 代掻きの前に牛を集め、神職による牛馬安全と五穀豊穡の儀式を行う(その後、御幣がさんばいに渡される) 1969年に県指定、翌年、国の「助成の措置を講ずべき芸能」となる	真下(1992)	
	高田郡高宮町原田	囃田	花田植	(写真のみ)	本田(1995)	
	高田郡高宮町原田	囃田	原田のはやし田	田の神さんばいを迎えて田植をする 代掻きの前に牛を集め、「牛清め」として神職による牛馬安全と五穀豊穡の儀式を行う(その後、御幣が綱掻き頭取りに渡される)	藤井(1995a)	
	高田郡高宮町原田	囃田		新庄のものど合わせ、「安芸のはやし田」として国指定	倉田(2008)* 仲井(2013)	
	島	高田郡井原村	仕事田	原田のはやし田	「来原さんばい祭」の一環として開催 「サンバイ迎え」として祭壇に向かって田植歌と囃子を奏することが特徴 深田が多い土地柄を反映して、「原田節」という田植歌では太太鼓が撥を後方の相手に投げるとい技を繰り広げる 新庄のものど合わせ、「安芸のはやし田」として国指定	松井(2013b)*
高田郡井原村		仕事田		(「国郡志下調べ帳」の記述)田植組による大田植でも歌謡を伴う田植を行っていた。ただし、囃子道具を入せず、歌のみの場合もあった	友久(1979)	
高田郡井原村		仕事田		友久(1979)と同内容	友久(1997)	
高田郡深瀬村		仕事田		(「国郡志下調べ帳」の記述)田植組による大田植でも歌謡を伴う田植を行っていた。ただし、囃子道具を入せず、歌のみの場合もあった	友久(1979)	
高田郡深瀬村		仕事田		友久(1979)と同内容	友久(1997)	
高田郡市川村		囃田	囃子田	(「国郡志下調べ帳」の記述)「有徳人大田」には囃子田といって、ほら貝や笛、太鼓、鉦の入った賑やかな田植があった	友久(1979)	
高田郡市川村		囃田		友久(1979)と同内容	友久(1997)	
高田郡栗谷村		牛供養	牛供養		本山(1934)	
高田郡本村字浜松		仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1949)	
高田郡三田村		囃田		「国郡志下調べ帳」に大田植(囃田)の記載	及川(1934)	
高田郡坂村		囃田		「国郡志下調べ帳」に大田植(囃田)の記載	及川(1935)	
高田郡市川村		囃田		「国郡志下調べ帳」に大田植(囃田)の記載	及川(1936)	
県		安佐郡安村	囃田	安の大田	大町に喜左衛門(湍田9町8反所有)が、自家の田植を上安の農家頼んだことが花田植の起源で、寛政年間には代掻きを工夫し、喝采を博す文化年間には伊予屋某という医者がしばしば領主にこの花田植を見せ、万延年間には「安の大田」として名声を博した 各地よりの見物人が増えたので、1872年に、相田、上安、高取、長楽寺を一同とする代掻き連中、音頭出し連中を募って大田植の団体を組織 明治後期には、同団体の名簿を作成して指定の区分を明確にするなど、芸能団体の組織化を進めた 「采振り」という9-14歳の少女が務める役がある	安佐郡安村農會(1928)
		安佐郡安村	囃田		安佐郡安村農會(1928)と同じ縁起を伝える ただし、寛政期以前、上安村の人たちは、初老・還暦・古希・米寿などの年祝いとして大田植を開いてきたとの記述あり	岩橋(1928a)
		安佐郡安村	囃田	安の花田植	安政・万延年間の花田植、1872年、1894・1895年の日清戦役後凱旋祝賀の大田植、1906年高木翁の還暦祝賀の大花田植えが特筆される 1974年頃、広島市三篠町新庄の富豪・谷川氏が安の花田植に出たいと出場したが、県令の御覧に緊張して「一層妙技を顕したり」と伝える(及川(1934)記載の内容に加え、具体的な開催手順、組織、経費の問題等を詳細に記載)	江木(1933)
	安佐郡安村	囃田	大田植/大花田植	安佐郡安村農會(1928)と同じ縁起を伝える ただし、寛政期以前、上安村の人たちは、初老・還暦・古希・米寿などの年祝いとして大田植を開いてきたとの記述あり 毎年5月に役員が集合し、大田植の施行方法や経費の割合を定め、当番部落が田植をする田、一番牛、駒所を選定し役員承認を得る 個人で祝賀の大田植を行う場合、1-4月に申し出、役員会の承認を得る 大田植の準備は当番部落の世話係が総取締らる役員と相談しながら進め、会場となる田だけを残して田植を終わらせる 采振りは小学校の女生徒、太鼓振りも小学校の生徒(両者とも太鼓の音に合わせて演技する)で、そこに大人が混ざり太鼓、鉦、鼓、笛を演奏 早乙女、采振り、太鼓振りは、数日前から毎晩練習をし、前日か当日には大花田植の衣装をつけて練習する(笠揃) 当日の田植は日没で終わり、翌日「植戻し」といい本植えをする	及川(1934)	
	安佐郡安村	囃田		サゲ(前立ともい)が田植歌の音頭出し役として、華やかな衣装を着る	柳田(1937)	
安佐郡安佐村鈴張	—		安芸石見系の田植本	友久(1972)		
安佐郡可部町大毛寺	—		安芸石見系の田植本	友久(1972)		

表 所在地ごとにみた大田植の記述 (つづき)

	地域	形式	地域での名称	大田植の記述 (儀式の内容、開催状況、由来など)	出典
広	安佐郡佐東町八木	—		安芸石見系の大田植本	友久(1972)
	佐伯郡吉和村	—		田植組による労働としての大田植	石塚(1979)
	賀茂郡有田村	—		高田郡型の大田植本	友久(1972)
	尾道市道在	?		西原南野の旅日記に「太鼓を打、鉦をならし、笛を吹、太鼓をうつものは手筈にて音頭を取様子也」とある	岩橋(1928a)
	甲奴郡総領町稲草	—		出雲備後系の大田植本	友久(1972)
	双三郡河内村	牛供養	牛供養		本山(1934)
	双三郡酒屋村	牛供養	牛供養		本山(1934)
	双三郡三次付近 (三次市付近)	牛供養	牛供養	田植休みの時期に主に博労などが周囲2~3里の村々から金銭や物品の寄付を募って開催 庭先での神仏混交での儀式、牛の道行、牛馬供養の儀式、田植作業と続き、「十五番の代掻きが無事に終ると期せずして破るが如き拍手喝采が(代掻き牛と追手)に浴びせられる」	本山(1934)
	〃	—		高田郡型の大田植本	友久(1972)
	双三郡布野村	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	双三郡布野村捨金	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	庄原市	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)
	〃	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)
	比婆郡東城町塩原 (小奴可)	牛供養		花宿・供養田を提供する者を「田主」といい、牛供養式を執り行う神職・僧侶・露払いのほか、代掻き、立人、囃子方、早乙女が参加する 1967年開催時の勸進元は22名	牛尾(1969)
	〃	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)
	〃	牛供養			藤井(1982)
	〃	牛供養	大山供養田植	広島県無形民俗文化財に指定	藤井(1991)
	〃	牛供養	大山供養田植	塩原の石神社前の田で開催される。1968年に県指定	真下(1992)
	〃	牛供養	大山供養田植	道化節後のちゃり(ササラス)が清精な所作をして人々の関心を引く	藤井(1995a)
	島	〃	牛供養		田植踊、供養行事、太鼓田植、お礼取めの次第からなる 当日には、代掻き牛の順番を決める競りが行われる(1番牛から10番牛までは競りで、それ以下はくじ引きで決める) 肥草を踏み込む古い農法を残し、牛に馬鐙を付けない 会場の田の北側にクボツマという三角形の田があり、そこにサンバイヤシロが作られ、早乙女たちはその田の周りを一周回ってから代に降りる 小奴可地区芸能保存会によって伝承。4年に1度の公開
〃		囃田	太鼓田	寛保3年の徳納家(村内第二位の大農)の「田植覚書」によれば、同家は村内手間返し、町・村内合力、日雇いによる労働構成によって、安芸地方の花田植のような大田植(手作り地の田植)行っていた	植木(2005)
〃		囃田/仕事田	太鼓田	寛保3年の徳納家(村内第二位の大農)の「田植覚書」より、同家が安芸地方の花田植と同様の田植(太鼓田)を行っていたことが分かる 組でも太鼓田を行い、約10戸の組でもサゲをできる者が2-3人はいた 現在でも太鼓田で用いていた田植太鼓を持つ家も多い	植木(2009)
〃		牛供養	塩原の大山供養田植	太鼓田への情熱が牛供養を支えた	植木(2009)
〃		牛供養	塩原の大山供養田植		小沢(2012)*
〃		牛供養	塩原の大山供養田植	行事は3日間に及び、1日目に苗取りと供養棚づくり、2日目に「太鼓田植」、3日目に「お礼取め」が行われる(現在は4年に一度の開催) 起源不詳。安政7年に大仙神社で牛馬供養式が開催された記録あり 牛に馬鐙を付けない	松井(2013c)*
〃		牛供養/仕事田	供養田植/太鼓田	大山信仰に基づいた牛供養儀式である供養田植と、大山信仰の要素を取り除いた太鼓田がある	石垣(2014)
比婆郡東城町川島		牛供養	牛供養花田植	出雲備後系の大田植本	友久(1972)
比婆郡西城町八鳥		牛供養	牛供養花田植	道行の前に、牛の順番を決める競りが存在(昔は米数俵を賭けた。 1991年開催時には10番牛までは競り、それ以下はくじ引きで決定)	藤井(1992)
〃		牛供養	牛供養花田植	藤井(1992)と同様の構成・次第を記載	藤井(1995a)
県	〃	牛供養	牛供養	家畜商が取引のある「愛牛家」の救済のために開催 代掻き牛の順番を競りにかけて寄付金を集める 1923年に内宮集落で、1936年に重国会集落で開催された	高野(2010)
	比婆郡西城町別所	牛供養	牛供養	1935年に牛供養が開催され、近郷から参加者が集まった	高野(2010)
	比婆郡油木村	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	比婆郡高野町	仕事田		田植組が残っている一部の集落(上里原下組など)で田植歌を歌いながら労働として田植をする(1962年当時)	友久・湯之上(1962)
	〃	—		(田植歌の採譜)	内田(1972)
	〃	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)
	比婆郡高野町和南原	—		出雲備後系の大田植本	友久(1972)
	比婆郡高野村高暮	仕事田		田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	比婆郡比和町	—		(田植歌の採譜)	内田(1978)
	〃	—		出雲備後系の大田植本	友久(1972)
比婆郡比和町比和	牛供養	牛供養	早乙女の衣装は統一されているが、囃し手(男性)のそれは統一されておらず、女性物の衣装などを思い思いに着て出場する 女性を見定める機会、代掻き牛の値段を決める機会でもあった	岡本(1963)*	
〃	牛供養			藤井(1982)	
〃	牛供養	牛供養田植	代掻きに際して「代布令」が綱手や牛・牛の出品者を紹介する 牛の供養が眼目であるため、牛の鞭は素朴なもの	浅野(1983)	
〃	牛供養	供養田植	広島県無形民俗文化財に指定	藤井(1991)	
〃	牛供養	牛供養田植	他地域の牛供養より全体の規模が格段に大きく、役割が細分化されている(代掻きに際して牛の情報を披露する「代触れ」が存在する等) 大規模な理由は畜産業の隆盛と、それによる大山への厚い信仰 1971年に県指定	真下(1992)	
〃	牛供養	供養田植	代掻きに際して「代布令」主な牛の出品者を紹介する	藤井(1995a)	
〃	牛供養		1948年、比和芸能保存会が舞踏家から新作舞踊の振り付けを習った	松井(2010)	

表 所在地ごとにみた大田植の記述(つづき)

	地域	形式	地域での名称	大田植の記述(儀式の内容、開催状況、由来など)	出典
広	比婆郡比和町森脇	牛供養	牛供養	獣医が写し退する際などに感謝の意として開催(1915・1922年)「シロプレー」という綱手や牛・牛の出品者を紹介する役がある牛供養のときに家畜商との牛馬取引もなされた	高野(2009)
	神石郡油木町	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1972)
	神石郡油木町新坂	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1978)
	神石郡神石町	—	—	出雲備後系の田植本	友久(1972)
	神石郡豊松村	牛供養/仕事田	供養田植/太鼓田	祭礼としての供養田植と仕事として行う太鼓田とがある供養田植の時には牛だけでなく馬も参加する備後系の田植ばやしでは珍しく笛の参加がある	内田(1964)
	神石郡豊松村	牛供養	大仙牛供養田植	1936年に青木氏を総頭取とした牛供養を開催	牛尾(1966)
	神石郡豊松村	牛供養	供養田植	(田植歌の採譜)	萩原(1966)
	神石郡豊松村	牛供養/仕事田	供養田植/太鼓田	(田植歌の採譜)	内田(1972)
	神石郡豊松村	牛供養/仕事田	供養田植/太鼓田	内田(1972)と同内容	内田(1974)
	神石郡豊松村	牛供養/仕事田	牛供養田植/太鼓田	出雲備後系の田植本	友久(1972)
島	神石郡豊松村	牛供養/仕事田	牛供養田植/太鼓田	牛馬供養の儀式を伴う牛供養田植と、それを伴わない太鼓田がある供養田植では、事前に大山の下山神社に参って幣を持ち帰り、儀式のあとに幣を同神社へ送って参る	内田(1978)
	神石郡豊松村	牛供養	—	(早乙女の「洗ひ川」の写真)	藤井(1982)
	神石郡豊松村	牛供養	供養田植	藤井(1995a)	藤井(1995a)
	神石郡豊松村	牛供養	供養田植	本田(1996)	本田(1996)
	神石郡豊松村有木	—	—	出雲備後系の田植本	友久(1972)
	神石郡豊松村下豊松川東	仕事田	—	荒神持ちである本家、小作経験を持たない家など、社会的・経済的地位の高い家で労働としての歌謡田植が行われていたサゲと歌謡田植を行う農家との関係はない	松尾(1981)
	神石郡豊松村	牛供養	大仙供養田植え	(写真のみ)	牛尾(1969)
	神石郡豊松村	牛供養	供養田植	広島県無形民俗文化財に指定	藤井(1991)
	神石郡豊松村	牛供養	供養田植	1966年に県指定	真下(1992)
	神石郡豊松村	囃田	太鼓田	牛供養から牛馬供養の要素を除いた田植のみの行事、芸北地方の「花田植」「大田植」「囃し田」にあたるものやや大きめで扁平な太鼓を片肩にかけて上から叩く	藤井(1995a)
県	神石郡豊松村	牛供養	牛供養/供養田植	比較的裕福な農家が主催主催者からの振舞いと参加者の主催者への尊敬が特徴	高野(2007)
	吉敷郡柚野村	仕事田	—	田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	吉敷郡柚野村釣山	仕事田	—	田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	吉敷郡仁保村	仕事田	—	田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	阿武郡阿東町生雲	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1972)
	阿武郡地福村地福	仕事田	—	田植組による労働としての大田植	石塚(1950)
	徳山市長穂	—	—	オロシ崩落系の田植本	友久(1972)
	徳山市長穂	—	—	出雲備後系の田植本	友久(1972)
	徳山市長穂	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1978)
	徳山市長穂	—	—	(田植歌の採譜)	内田(1978)
山	玖珂郡余田村	囃田	囃田	住民が天明年間の飢饉に際し清水の湧出する田を選んで行った、伊勢神宮に祈願する田植が起源と伝え、以後は年々豊作祈願として開催明治維新後漸次衰退も、1928年に青年団・主婦会の主催によって復興代播きの図、道行の順番、田植作業時の配列等を解説(農村娯楽を発展させるための資料として紹介)	山口縣農事試験場(1933)
	大島町三浦(周防大島)	囃田	—	毎年ではなく、目出度いことがあった家が施主として開催家の新築記念、ハワイへ出稼ぎに行って戻ってきた者が水田を買入れた記念などが開催動機で、最後の開催が1918年	宮本(1967[1964])
	橘町日前(周防大島)	囃田	—	毎年ではなく、目出度いことがあった家が施主として開催周防大島のなかでは最も頻繁に行い、家の新築や快気祝いなどが動機	宮本(1967[1964])
	愛媛県上浮穴郡久万町	—	—	囃し田形式の田植歌が残存	上西(1996)
	高知県高岡郡窪川町仁井田地区・若井地区	—	—	囃し田形式の田植歌が残存	上西(1997)
	高知県高岡郡東津野村	—	—	囃し田形式の田植歌が残存	上西(1998)
	高知県高岡郡仁井田郷窪山村	囃田/仕事田	囃子田/太鼓田	1835年の「巷謡編」に早乙女30-70人規模で、太鼓2人、ササラ2-3人の囃子が入る田植の記載がある	植木(2009)
	福岡県宗像郡野坂村	仕事田	太鼓田植	中村家における1827年の太鼓田植の記録が残る同家の2町8反9畝の田に対し、村中の各家から1-2人参加する大規模なものであった(鉦・太鼓・笛の囃子含む、総勢229人)	中村(1974)
	福岡県宗像郡野坂村	仕事田	太鼓田植	中村(1974)の引用	植木(2009)
	他	鹿兒島県大島郡徳之島町徳和瀬	囃田/仕事田	—	「タカモチ」と呼ばれる3反以上の田を持つ家の田植では、作業効率を高めるため、「歌イベン」という音頭取りが畔に立って太鼓を叩き、早乙女との田植歌の掛け合いで作業を進行した
鹿兒島県大島郡徳之島町徳和瀬		囃田/仕事田	—	松山(2004)の引用	石垣(2014)
鹿兒島県大島郡徳之島町徳和瀬		囃田/仕事田	—	松山(2004)の引用	石垣(2014)

- ・「地域」については、基本的には著作物に即した地名を記載した。
- ・「形式」については、牛馬供養の目的で開催されるものを「牛供養」(安芸・石見地方のものも含む)、牛馬供養の目的を含まない大規模で祭礼的な大田植を「囃田」(出雲・備後地方のものも含む)、正確には大田植に含まれないが、水田から離れて神社等で行われている派生芸能を「田楽」

として分類した。また、大田植には、祭礼的ではなく、田植組等で労働として行う場合もあり<sup>2</sup>、それを「仕事田」とした。

- ・筆者が冒頭で示すような、一般的な説明にとどまる場合には「大田植の記述」を空欄にした。
- ・「出典」については、学術的な著作物と一般的なそれ（研究者が一般的な書籍・雑誌に寄稿したものの含む）とを区別するため、後者には「\*」を付している。
- ・田唄研究会『田植草紙の研究』（1972）や同会の機関紙『田唄研究』に夥しい田植歌の歌詞の引用がみられるが（そのほとんどがごく一部分のみの引用）、具体的な地名や、大田植との関連が読解できないものが多く、原則として作業の対象から外した。

## （2）記載内容の検討

上述の抽出・整理作業の結果から導き出された知見を、以下に列挙する。

### ①特定地域への記述の集中

山県郡千代田町壬生や山県郡大朝町新庄、比婆郡東城町塩原（小奴可）など、比較的少数の地域に記述が集中している。学術的でない、一般の雑誌等で確認される大田植の記事においてこの傾向が一層強い。これらはいずれも国の無形民俗文化財に指定されている大田植（それぞれ「壬生の花田植」「新庄のはやし田」「塩原の大山供養田植」）の伝承地であり、「文化財」という重要性の裏付けが言及の集中した一因と考えられる。もちろん、『田植草紙』が発見された大朝町の「新庄のはやし田」のように、学術的な注目から自然と言及が多くなった場合もあると考えられる。

ただし、大田植が全国に向けて報告され始めた初期段階（1910～30年代）においては、それらではなく、安芸郡安村の「安の大田（花田植）」と島根県飯石郡の「牛供養」が注目されている。また、大田植の歴史的な検討においては、山県郡千代田町有田の一乗寺、高田郡八千代町土師の岡崎家、高田郡吉田町多治比の丸屋における近世の記録が取り上げられることが多い。

### ②日常的な労働としての大田植に関する多数の報告

一般的には華やかな囃田・牛供養を大田植とみなす傾向が強いが、大田植に関する報告には仕事田についての報告が相当数含まれている（報告数65、地域数53）。

### ③同一地域における大田植の形態的な複数性

同一地域において様々な規模・形態の大田植が行われていた。たとえば、山県郡千代田町壬生では、田植組合内での小規模な予祝儀礼としての「はやし田」と、大地主のもとでの大規模な予祝儀礼である「花田植」の二つがあった（藤井 1995a）。また、比婆郡東城町塩原においては、牛馬供養を目的とする非日常的な牛供養（牛尾 1969など）、地主による牛馬供養を目的としない祭礼的な「太鼓田」（植木 2009）、田植組による労働としての「太鼓田」（植木 2009）の三形態が併存している。

<sup>2</sup> この場合の大田植は、「自家の最も大きな田（大田）に対する田植」の意と解される。

牛供養、囃田、田楽の併存状況も、鳥根県能義郡広瀬町比田地区で確認される。

#### ④日常的な仕事田と非日常的な囃田との連続性

仕事田と囃田との間には、田植組によるか主に地主主催によるかの違いはあるが、芸態において明確な線引きは存在しない。たとえば、山県郡千代田町有田の大地主であった一乗寺の大田植はきわめて大規模で、明和年間の記録には囃し手が多数（早乙女と囃し手合わせて約200人、前者よりも後者が多い）参加したことが記されている（植木 2009）。それに対し、日野郡日南町の旧・日野上村の山形家の田植は3町5反、早乙女60人と大規模であったが、サゲ6人が確認されるものの、囃し手の参加はかなり少ない（牛尾・友久 1969）。両事例はともに大規模な地主手作り地の田植であり、囃田の一種といえるが、前者は祭礼的な色彩が濃く、後者は労働的な色彩が濃い。さらに労働的な色彩が濃くなると田植組による仕事田となるが、それでも太鼓や笛が入る（宮本 1976 [1940]）。すなわち、大田植にみられる日常・労働（仕事田）と非日常・娯楽（囃田）との間に明確な境界はなく、仕事田から囃田へ、多数の中間形態を含みながら、両者はグラデーショナルに連続しているとみるべきである。ただし、牛供養は目的が限定されるためにこの限りではない。

#### ⑤安芸・石見地方における牛供養、出雲・備後地方における囃田の存在

大田植は「安芸・石見地方＝囃田」「出雲・備後地方＝牛供養」の二分法で理解されがちであるが、囃田と牛供養は両地域でともに確認される。安芸・石見地方では、美濃郡匹見町内谷における新田開拓時の牛供養（矢富 1966）、山県郡雄鹿原村における獣医や分限者による牛供養（六郷 2014）、高田郡栗谷村の牛供養が報告されている（本山 1934）。反対に、出雲・備後地方においても、先の東城町塩原の「太鼓田」や比田地区の「大のう」など、牛馬供養の儀式や目的を含まない囃田相当の習俗が報告されている。雄鹿原村での牛供養を報告した六郷は「大正期まで遡れば田植行事の安芸と備後の差異は、現在ほど大きくなかったものと推定できる」と述べている（六郷 2014 : 124）。

#### ⑥囃田・牛供養における開催動機や開催形態の多様性

非日常的な田植（囃田・牛供養）を実施する動機や開催形態には、さまざまなものがみられる。

動機においては、自家や田植組での田植だけでなく、新田開拓に際して行う（美濃郡匹見町の牛供養、矢富 1966）、大きな百姓の年祝いとして開催（山県郡八幡村八幡・樽床の囃田、宮本 1976 [1940]）、獣医の借金返済のため（山県郡八幡村八幡・樽床の牛供養、宮本 1976 [1940]）、日清戦争凱旋祝賀（安佐郡安村の囃田、江木 1933）、獣医の引退行事として（比婆郡比和町森脇の牛供養、高野 2009）、家畜商による取引先の救済のため（比婆郡西城町八鳥の牛供養、高野 2010）などが挙げられる。開催動機においては、概して囃田よりも牛供養の方がバリエーションに富んでいる。

開催形態では、地主や家畜商・獣医らの単独開催のほか、集落での共同（大田市大代町の囃田、内田 1978）や行政村内での持ち回り（飯石郡の牛供養、遠藤 1930）、一定規模の土地所有者での持ち回り（川上郡湯野村の大田植、及川 1934）がみられる。なお、開催形態に関しては、開催の

ための物品（米麦、その他の穀物・雑品）を伯楽（獣医と家畜商を兼ねた職業）の協力も得て近隣の村々から集める、その提供した物品の多さで代掻き牛の順番を決定するという飯石郡の牛供養（及川 1934、風俗研究会 1917）、一帯に頃合いをみて開催日時を知らせておくとは当日は方々から家畜商が牛を連れてきたと集まったとする川上郡湯野村の大田植の記述（及川 1934）が興味深い。

#### ⑦衰退理由の多様性

大田植が衰退した理由については、主要な開催者であった地主の没落のほか、綱植えから杵植えへの移行（難波 1966）、農家経営への負担が大きすぎたこと（平沼 2016）、農事での囃子や歌唱を禁じる明治後期の広島県知事令（「農十大必綱」）の影響（真下 1992など）が挙げられている。

#### ⑧水田を離れた芸能を派生させる事例の散見

前稿でも言及したが、「田囃子」「丘囃子」「庭つづみ」などという田楽を派生している地域が多数みられる（報告数50、地域数26）。地域的には、とくに島根県の益田市・美濃郡・那賀郡、広島県の山県郡といった、安芸・石見地方に偏重している。その背景には、昭和初期の安芸地方北部において商工会主催の田楽競演大会が盛んに開催されたことや、先の広島県知事令の影響が考えられるが、正確な理由は明らかでない。

#### ⑨瀬戸内海沿岸部・島嶼部での大田植の存在

一般に大田植は中国山地で伝承される習俗と理解されている。もちろん、当該地域に濃密に分布するが、尾道市（岩橋 1928a）など、そこから離れた瀬戸内海沿岸部にも分布する。とくにそうした事例は山口県において多数確認され、周防大島でも2事例が報告されている（宮本 1967 [1964]）

#### ⑩中国地方以外における大田植の存在（大田植の全国的な広がり）

四国地方の愛媛・高知県だけでなく、九州地方の福岡・鹿児島県においても大田植に類似する習俗の存在が指摘されており、大田植が全国的な広がりをもっていたことが推測されている。ただし、なぜ中国地方にのみ大田植の習俗が残存したのかについて確立した見解は存在しない。宮本常一が気候や耕地の条件（中国地方は温暖で湿田が少ない）、たたら製鉄の従業者など、芸能を好んだ「ボヘミアン的な性格をもったもの」の存在から推論しているのみである（宮本 1967 [1964]）。

### Ⅲ おわりに

中国地方の山間部に広くみられた大田植は、様々な分野から日本文化を考究するうえで重要な事象（民俗事象、民俗芸能、中世文芸、民俗音楽）として注目を集めてきた。その一方、どの地域でいかなる大田植が行われている（いた）のか、その具体的な分布と種類については全体像が十分には捉えられていなかった。

本稿では、以上の問題意識に基づき、研究者による学術的な著書・論文・雑誌記事および一般的な雑誌に含まれる大田植の記述を整理した。その結果、432の記述、181の事例地域を抽出することができ、多くの知見を得ることができた。主に行政による記録・調査報告書を整理した前稿と合わ

せ、すでに多くの大田植の事例を把握したことになるが、いまだ市町村史（誌）等の「郷土資料」の整理が残されている。かかる資料の整理と、大田植の分布・種類に関する検討作業全体を通じた総括（地図化や分類、全体的傾向の指摘など）を今後の課題とする。

#### <文献>

- ・安佐郡安村農會（1928）. 廣島縣安佐郡安村の花田植. 民俗芸術, 1（1）, 80-86.
- ・浅野日出男（1983）. 比和の牛供養田植. 伝承文学研究, 29, 108-116.
- ・麻生芳伸（1973）. 農民の遺産・壬生花田植. 日本と世界の旅, 212, 90-94.
- ・天野忠良（1996）. 壬生の花田植（広島県）. 通産ジャーナル, 29（6）, 4-5.
- ・石垣 悟（2014）. 技術としての田植、精神としての田植：壬生の花田植への期待. 広島県北広島町編『ユネスコ無形文化遺産 壬生の花田植：歴史・民俗・未来』吉川弘文館, 42-84.
- ・石田 千（2013）. 唄めぐりの旅（15）ヤハーハーレー花田植. 芸術新潮, 64（8）, 150-156.
- ・石塚尊俊（1949）. 田植組と田植方式：中国地方の大田植に於ける, 民間伝承, 13（6）, 7-14.
- ・石塚尊俊（1975）. 『民俗学への道』山陰民俗学会.
- ・印南高一編著（2012）. 『日本郷土風俗・民芸・芸能図鑑』日本図書センター.
- ・伊藤権一郎（1921）. 出雲南部の牛供養. 大日本農会報, 489, 31-33.
- ・今野円輔（1964）. 田植と性の祭り. 今野円輔『季節のまつり（日本の民俗；7）』河出書房新社, 122-142.
- ・入江菊之助（1974）. 芸北の大花田植. 法曹, 287, 2-7.
- ・岩橋小彌太（1928b）. 囃し田を觀て. 民俗芸術, 1（6）, 73-75.
- ・岩橋小彌太（1928a）. 花田植の寫眞を觀て. 民俗芸術, 1（5）, 9-20.
- ・宇井眞紀子（2002）. 日本の伝統芸能・行事（4）花田植（広島県・山県郡千代田町）. 月刊JA, 48（7）, 2-5.
- ・植木行宣（1982）. 田楽の村. 芸能史研究会編『日本芸能史2 古代-中世』法政大学出版局, 172-199.
- ・植木行宣（2005）. 囃田と大山供養田植. 植木行宣『風流踊とその展開』岩田書院, 173-181.
- ・植木行宣（2009）. 田遊びと田楽. 植木行宣『中世芸能の形成過程』岩田書院, 11-54.
- ・上田稻吉（1929）. 安藝の「囃し田」. 民俗芸術, 2（10）, 40-54.
- ・内田るり子（1963）. 「田植ばやし」の音楽的研究（一）：島根県邑智郡石見町青笹の「田植ばやし」について. 田唄研究, 5, 1-16.
- ・内田るり子（1964）. 「田植ばやし」の音楽的研究（二）：広島県神石郡豊松村の「田植ばやし」. 田唄研究, 6, 1-10.
- ・内田るり子（1965）. 「田植ばやし」の音楽的研究（三）：島根県大田市大代町の小笠原流の田植

囃子について. 田唄研究, 8, 19-25.

- ・内田るり子 (1966) . 田植囃子の音楽的研究 (四) : 鳥根県那賀郡三隅町黒沢の田植囃子について. 田唄研究, 9, 13-25.
- ・内田るり子 (1967) . 広島県高田郡高宮町来原の「田植囃子」: 特に七・七・四調田植歌謡の音楽的展開の問題を中心にして. 田唄研究, 10, 31-41.
- ・内田るり子 (1972) . 田唄研究会『田植草紙の研究』三弥井書店, 292-370.
- ・内田るり子 (1974) . 広島県神石郡豊松村の供養田植: 民族音楽的考察. 季刊人類学, 5 (4) , 79-121.
- ・内田るり子 (1978) . 『田植ばやし研究』雄山閣.
- ・内田るり子 (1988) . 壬生の花田植 (広島) . 国文学解釈と鑑賞, 53 (5) , 125-127.
- ・牛尾三千夫 (1955) . 大田植の話. 和歌森太郎ほか編『日本文化風土記 第6巻 中国・四国篇』河出書房, 215-220.
- ・牛尾三千夫 (1962) . 花田植・田囃子. 和歌森太郎編『西石見の民俗』吉川弘文館, 323-333.
- ・牛尾三千夫 (1966) . 田植歌略本. 田唄研究, 9, 38-50.
- ・牛尾三千夫 (1969) . 花田植え. 月刊文化財, 69, 11-17.
- ・牛尾三千夫 (1972) . 田植草紙の民俗. 田唄研究会『田植草紙の研究』三弥井書店, 155-188.
- ・牛尾三千夫 (1979) . 田植歌の調査・研究をふりかえって. 伝承文学研究, 23, 18-23.
- ・牛尾三千夫 (1986) . 『大田植の習俗と田植歌』名著出版.
- ・牛尾三千夫・友久武文 (1969) . 日南町谷本田唄集. 69-82.
- ・上西律子 (1996) . 五七七四詞型田歌の音楽的特徴: 囃し田における歌掛けの実際を通して. 民俗音楽研究, 19, 65-75.
- ・江木清一 (1933) . 花田植. 江木清一『農村永遠の更生』昭文社, 164-180.
- ・遠藤利男 (1930) . 異風奇風 出雲の牛供養. 旅, 7 (5) , 106-108.
- ・及川儀右衛門 (1934) . 大田植 (大花田植) . 及川儀右衛門『芸備今昔話』一誠社, 235-261.
- ・岡村直樹 (2000) . 綺羅を尽くす民俗芸能: 花田植え, 土地改良, 38 (3) , 58-61.
- ・岡本太郎 (1963) . 花田植: 農事のエロティスム. 中央公論, 78 (10) , 206-216.
- ・小沢康甫 (2012) . 『みるきくたべる祭 (まつ) ーリズム: 中四国を歩く』南々社.
- ・オリンピック東京大会組織委員会 (1964) . 囃し田. オリンピック東京大会組織委員会『オリンピック東京大会芸術展示 民族芸能』オリンピック東京大会組織委員会, 頁数なし.
- ・川嶋麗華 (2018) . 農業変化の中の「壬生の花田植」の伝承. 日本民俗学, 295, 1-35. (新谷尚紀編『民族伝承学の視点と方法: 新しい歴史学への招待』吉川弘文館. にも所収)
- ・倉田 波 (2008) . 大花田植 (広島県北広島町) . Fole, 70, 46-49.
- ・建設省広報協議会 (1998) . 初夏の一大絵巻: 壬生の花田植え. 建設月報, 51 (5) , 76-77.

- ・ 齊藤裕嗣（1991）．まつり風土記：壬生の花田植（広島県）．文部時報, 1374, 4.
- ・ 酒井卯作（1958）．花田植. 酒井卯作『稲の祭』岩崎書店, 130-133.
- ・ 佐々木幸恵（1994）．46年ぶりに復活した島根県広瀬町の「牛供養」．週刊新潮, 39（33）, 42.
- ・ 神野 力（1984）．備中北部の大田植. 神野 力『岡山の祭と踊』日本文教出版, 32-33.
- ・ 新藤久人（1956）．『広島県の農村に於ける年中行事 1 田植とその民俗行事』年中行事刊行後援会.
- ・ 新藤久人（1964）．田囃しと大花田植. まつり, 7, 17-22.
- ・ 新藤久人（1976）．重要無形民俗文化財「壬生の花田植」保存をめぐって. 文部時報, 1192, 29-35.
- ・ 尊鉢隆史（2017）．子どもの伝統芸能から考える地域創成：出雲・石見地方（島根県）の取り組みから. 地域創成研究叢書：地域の創成に向けて, 10, 87-106.
- ・ 高野 宏（2007）．地域社会との関係からみた大田植の習俗：昭和戦前期・広島県豊松村川東地区における事例. 人文地理, 59（5）, 381-401.
- ・ 高野 宏（2009）．大正・戦前昭和期における「大田植」存続の地域的意義：広島県比和町森脇の畜産業との関係から. 歴史地理学, 51（2）, 1-20.
- ・ 高野 宏（2010）．大正・昭和戦前期における大田植の社会的基盤と地域的意義：広島県西城町八鳥を事例として. 地理学評論, 83（6）, 565-584.
- ・ 高野 宏（2018a）．大田植の分布と種類に関する検討：行政による記録・調査報告書を中心に. 岡山大学文学部紀要, 70, 31-42.
- ・ 高野 宏（2018b）．地域との関係からみた大田植の変化：島根県安来市広瀬町比田地区の場合. 岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要, 46, 43-63.
- ・ 宝塚歌劇団（1959a）．郷土民謡の旅「花田植」取材紀行と下呂の山ノ神祭り, 歌劇, 402, 66-73.
- ・ 宝塚歌劇団（1959b）．日本民俗舞踊の第二作 花田植. 歌劇, 403, 74-80.
- ・ 高橋秀雄（1979）．ふるさとの芸能を訪ねて：囃し田（広島県）．全建ジャーナル, 18（6）, 42-43.
- ・ 高柳金芳（1973）．民俗行事紹介：囃田. トランスポート, 23（5）, 60-61.
- ・ 田川時彦（1953）．芸北に見る囃田. 芸能復興, 3, 32-35.
- ・ 田中瑩一（1961）．新庄の花田植をみる. 田唄研究, 1, 42-43.
- ・ 田中瑩一（1987）．大路・砂田屋本『五月歌之集』「牛供養の田うへうたの次第」：島根県簸川郡佐田町田植歌資料. 山陰地域研究, 3, 伝統文化, 縦組81-94.
- ・ 田中瑩一・牛尾三千夫（1971）．出雲図書館所蔵・木村改九郎本田植歌. 田唄研究, 14, 48-60.
- ・ 友久武文・湯之上早苗（1962）．備後地方の田植唄. 田唄研究, 3, 25-31.
- ・ 友久武文（1972）．安芸石見の田植本と田植草紙. 田唄研究会『田植草紙の研究』三弥井書店, 371-436.

- ・友久武文 (1979) . 囃し田の歌謡. 日本歌謡研究, 18, 7-12.
- ・友久武文 (1997) . 囃し田と『田植草紙』. 佐竹昭広ほか編『田植草紙・山家鳥虫歌・鄙廼一曲・琉歌百控』岩波書店, 575-591.
- ・仲井幸二郎 (2013). 神事としての田植え<囃田>. 仲井幸二郎『口訳日本民謡集』日本図書センター, 388.
- ・中村正夫. (1974) . 筑前宗像の太鼓田と田唄資料. 田唄研究, 15, 1-9.
- ・難波宗朋 (1966) . 岡山県北の田植歌：阿哲郡哲西町大字矢田に伝わるもの. 田唄研究, 9, 26-37.
- ・日本青年館 (1928) . 囃し田と虫送り踊 廣島縣. 日本青年館『郷土舞踊と民謡 第3回』日本青年館, 7-12.
- ・野本寛一 (1990) . 囃し田の里：坪井洋文先生追悼, 民俗文化, 2, 389-392.
- ・芳賀日出男 (1959) . 大田植. 芳賀日出男『田の神：日本の稲作儀礼』平凡社, 27-44.
- ・芳賀日出男 (1962a) . 大田植. 俳句, 11 (7) ,90-95.
- ・芳賀日出男 (1962b) 壬生の大田植. 芸能, 4 (8) , 42-43.
- ・芳賀日出男 (1965) . 『日本の祭り』保育社.
- ・芳賀日出男 (1969) . 日本の祭り：花田植. 都道府県展望, 129, 41.
- ・芳賀日出男 (1977a) . 歳時記 日本の祭 (2) 大田植, 教育音楽 (小学版) , 32 (6) ,65.
- ・芳賀日出男 (1977b) . 歳時記 日本の祭 (2) 大田植, 教育音楽 (中学版) , 21 (6) ,65.
- ・芳賀日出男 (1997a) . 『日本の民俗：祭りと芸能』角川書店.
- ・芳賀日出男 (1997b) . 祭りと食 花田植. 食べもの文化, 236, 目次部分.
- ・芳賀日出男 (2006) . 花田植. 芳賀日出男『学習に役立つわたしたちの年中行事 6月』クレオ, 6-7.
- ・萩原秀三郎 (1966) . 豊松の供養田植. 芸能, 8 (8) , 38-39.
- ・萩原秀三郎 (1969) . 原田と黒沢の囃し田, 芸能, 11 (7) , 46-47.
- ・橋本裕之 (1996) . 保存と観光のはざままで：民俗芸能の現在. 山下晋司『観光人類学』新曜社, 178-188.
- ・橋本裕之 (2014) . 神と鎮魂の民俗学を遠く離れて：俗なる人々の芸能と出会うために. 橋本裕之『舞台の上の文化：まつり・民俗芸能・博物館』追手門学院大学出版会, 249-277. (初出1997年)
- ・久枝秀夫 (1969) . 大田植の楽器：サンバイ竹. 田唄研究, 12, 37-40.
- ・平沼 浩 (2016) . 土地の記憶を行動で共有する (1) 壬生の花田植. 共済総研レポート, 147, 24-33.
- ・風俗研究会 (1917) . 山中の牛供養 (出雲) . 風俗研究会編『一国一奇面白風俗噺』八木清一郎, 109-113.
- ・藤井 昭 (1979) . 中世末期、安芸地方における「田植・牛懸」について. 田唄研究, 39-45.

- ・藤井 昭（1982）．花田植．芸備地方史研究, 135・136, 35-37.
- ・藤井 昭（1991）．備後八島の牛供養花田植とその周辺：行事の次第と組織．広島女学院大学論集, 41, 236-221.
- ・藤井 昭（1995a）．『芸備地方のまつり：稲作を中心として』第一法規．
- ・藤井 昭（1995b）．近世芸備地方の産業と文化：花田植．カレントひろしま, 112, 42-45.
- ・本田郁子・中野祐子（1988）．稲作と舞踊（1）：中国山地の「囃子田」を事例として．舞踊学, 1988（11）, 19-20.
- ・本田郁子・中野祐子（1989）．俗舞踊の運動表現特性とコミュニケーション：中国山地の稲作行事「囃子田」を事例として．舞踊学, 1989（12）, 31-43.
- ・本田郁子（1992）．「ハレ」と「ケ」の融合：中国山地の『囃子田』にみる合理性と機能性．学校体育, 45（2）, 78-80.
- ・本田安次（1995）．田楽考．本田安次『本田安次著作集 日本の伝統芸能第 第八巻 田楽Ⅰ』錦正社, 1-49.
- ・本田安次（1996）．囃子田．本田安次『本田安次著作集 日本の伝統芸能第 第九巻 田楽Ⅱ』錦正社, 339-354.
- ・真下三郎（1992）．『広島県の囃し田』溪水社．
- ・松井今日子（2010）．安芸地方の囃し田における伝承実践の二面性：視覚的身体表現の形成過程をめぐって．東洋音楽研究, 76, 101-115.
- ・松井今日子（2011）．原東大花田植における田鼓の身体表現の構成．日本文化論年報, 14, 252-80.
- ・松井今日子（2012）．囃し田における所作と歌謡進行のメカニズム：安芸地方を中心に．民俗芸能研究, 52, 81-104.
- ・松井今日子（2013a）．壬生の花田植．星野紘, 宮田繁幸, 久保田裕道, 城井智子, 全日本郷土芸能協会編『民族芸能探訪ガイドブック』国書刊行会、2013、270-271.
- ・松井今日子（2013b）．安芸のはやし田．星野紘, 宮田繁幸, 久保田裕道, 城井智子, 全日本郷土芸能協会編『民族芸能探訪ガイドブック』国書刊行会、2013、274-275.
- ・松井今日子（2013c）．塩原の大山供養田植．星野紘・宮田繁幸・久保田裕道・城井智子・全日本郷土芸能協会編『民族芸能探訪ガイドブック』国書刊行会、2013、276-277.
- ・松井今日子（2016）．現場から考える無形文化遺産保護：中国山地の囃し田と壬生の花田植を事例に．民俗芸能研究, 61, 70-92.
- ・松尾容孝（1981）．広島県山間部農村における歌謡田植の衰退過程．人文地理, 33（4）, 64-74.
- ・松山光秀（2004）．『徳之島の民俗1：シマのこころ』未来社．
- ・真鍋昌弘（1971）．囃子田における象徴性をめぐって．芸能史研究, 35, 34-43.
- ・真鍋昌弘（1972）．田植草紙の文芸．田唄研究会『田植草紙の研究』三弥井書店、40-94.

- ・宮本常一 (1967) . 大田と大田植. 宮本常一『風土と文化』 未來社, 104-125. (初出1964)
- ・宮本常一 (1976) . 広島県山県郡八幡村八幡及樽床. 宮本常一『中国山地民俗採訪録』 未來社, 115-143. (原稿は1940年に書かれたもの)
- ・宮本常一 (1984) . 稲作と祭り. 宮本常一『中国風土記』 未來社, 267-286. (初出1956)
- ・本山桂川 (1934) . 牛神と牛供養. 本山桂川『信仰民俗誌』 昭和書房, 351-358.
- ・森 悦子 (2014) . 花田植の現在. 広島県北広島町編『ユネスコ無形文化遺産 壬生の花田植:歴史・民俗・未来』 吉川弘文館, 134-162.
- ・矢富熊一郎 (1966) . 花田植え.『石見匹見民俗』 島根郷土史学会, 95-144.
- ・柳田國男 (1929) .『都市と農村』 朝日新聞社.
- ・柳田國男 (1937) . 花田植. 柳田國男『分類農村語彙』 信濃教育会, 103-112.
- ・山口縣農事試験場 (1933) . 玖珂郡余田村に於ける囃田に就て. 山口縣農事試験場『挿秧作業調査概要』 山口縣農事試験場, 78-84.
- ・山崎敬子 (2000) . 西角井ゼミの花田植体験記, 藝能, 6, 106-108.
- ・横田淑子 (1985) . 囃田歌謡群を手がかりとした日本詩歌の「韻律素」に関する試案: 音数律を超えるもの. 梁塵= 研究と資料, 3, 59-76.
- ・横田淑子 (1987a) . 調査報告 新庄囃田. 伝承文学研究, 34, 72-80.
- ・横田淑子 (1987b) . 囃田歌謡群を手がかりとした日本詩歌の「韻律素」に関する試案 (2) - 自由リズムの韻律素. 中世歌謡研究会編『梁塵: 日本歌謡とその周辺 新聞進一先生古稀記念』 桜楓社, 217-235.
- ・山路興造 (1962) . 島根県に於ける田植草紙保存の現状. 田唄研究, 3, 48-49.
- ・山と溪谷社 (1967) . 壬生の花田植祭<広島県>. 山と溪谷社『カラー日本のまつり』 山と溪谷社, 83-84.
- ・山中耕作 (1991) . 壬生の花田植え: 広島県山県郡千代田町. 西南学院大学国際文化論集, 6 (1) , 117-122.
- ・六郷 寛 (2014) . 花田植の歴史. 広島県北広島町編『ユネスコ無形文化遺産 壬生の花田植:歴史・民俗・未来』 吉川弘文館, 103-133.

